

近況報告

河北総合病院 脳神経外科 仲間 秀 幸

お久しぶりです。平成2年卒業の4期生、仲間と申します。私のようなものの報告で、本当に恐縮なのですが、ちょっと紙面を汚させていただきます。

私は卒業後琉大の脳外科医局に入局し、2年ほど研修した後、平成4年から東京都大田区にある東京労災病院にお世話になり、そこで脳外科の専門医を取得しました。その後いろいろあり、だらけていましたが、当時の琉大脳外科の講師である山城勝美先生に喝をいれられ、平成12年から国立精神神経センター武蔵病院（現国立精神・神経医療研究センター病院）にお世話になりました。同病院では機能的脳神経外科（てんかんやパーキンソン病などの外科）の研鑽をしながら、併設の神経研究所にて細胞移植の基礎研究に関わる機会を得て、思いがけず学位も取得できました。当時の武蔵病院は全国から難治てんかんの患者が集まってきており、臨床的にも、研究においても非常にやりがいのある時間を過ごすことができましたが、一方ではなにか満ち足りないものを感じていました。“ちょっと違うんじゃないかな”そう感じた1番の理由は、全国から患者が集まってくるがゆえに、退院後の接触が非常に制限されてしまうことでした。仕方ないんですが、術後のフォローは地元の病院にほぼ丸投げせざるを得ない患者が非常に多かったんですね。私は沖縄の離島、宮古島の出身であり、私にとっての医療＝地域医療ですから、その点では非常にストレスを感じていました。2番目の理由は、あまりにも専門的な領域のため、脳血管障害や外傷などの、一般的な脳外科手術を行う機会がほとんどなかったことです。40歳になった時、地域の第一線病院で一般脳外科医としてやり直せるのは、年齢的にそろそろ限界と判断し、一般脳外科医としての再就職を具体的に考え始めました。この時点で沖縄に戻ることも考えましたが、子供（娘二人）の学校の問題もあり、家も建ててしまっていたので、結局自宅のある東京都小平市周辺の病院を探すことにしました。

平成20年から、現在の職場である河北総合病院に移り、充実した毎日をおくっています。同病院は、東京都杉並区にあるベッド数391床の中規模総合病院であり、小児科を含めた地域の救急医療に力を入れている病院です。救急受け入れ件数は年間1万件に迫っており、脳外科の手術件数は年間170件程度で

増加傾向にあります。杉並区で脳外科手術ができる病院は、実は当院だけであり、現在私を含めた医師2人で頑張っております。卒後教育にも力を入れており、琉大出身者もこれまでに数人、研修医として働いています（今年度からは槇田弘君が活躍中です）。その他耳鼻咽喉科では下地善久先生、救急部では高橋賢亮先生と、以外に多くの琉大卒業生が活躍している病院でもあります。

以上、近況報告です。会員の皆様の更なるご活躍を祈っております。どうも有り難うございました。

「たくさんの出会いに支えられて」

関東病院 内科 長崎 直 美

横浜に住んで20年余りが過ぎ、沖縄で過ごした期間を超えようとしています。

当時は少なかった、スーパーローテーションの研修病院を選び横浜にやってきました。小児科医を目指して研修終了後は都内の小児病院に勤務するつもりでいました。ところが、内科研修中に“女性医師は、ニッチな分野(?)を攻めるべし”と説得され透析医となってしまいました。医局員を増やすための作戦に見事にハマってしまったようです。外科系の先生方も一緒に医局でしたので、当然ながら早朝から深夜まで仕事三昧の日々でした。おかげで、いつでもどこでも寝られるようになりました。子供が生まれてからもこの経験は大いに役に立っています。(笑)

Burn outに近い状態で医局を離れたのですが、医局の先輩医師（男性）から「10年もすれば、女性医師も働きやすい時代がやってくる。細々とでもいいから絶対に仕事を続けなさい。今、できることを精一杯やればいいんだよ。」と励まされ、その後は一般病院で透析医として働いていました。

ある時、ひよんなことから研修医時代の友人の“女性クリニック”の立ち上げを手伝うことになりました。気軽に引き受けたものの、内心とても不安だった私に彼女から一言「女性のキャリアは、(男性から)5年遅れていいのよ。これから学ばばいいじゃない。」目から鱗でした。不思議なもので自分が必死になって動き始めると周囲が連動するように動き始め、たくさんの友人や先輩方に助けていただきました。今でも、本当に感謝しています。

女性クリニックを始めてみて、多くの女性が自分の心や体について正しい知識をほとんど持ち合わせていない事に驚きました。今後は治療だけでなく予防医学的な観点からの啓蒙活動も大切な役目の一つ